2022年度　入学試験問題

国　語

（第4回）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、
　解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、一部見やすくするために原文に手を加えています。

私たち現代人は、日夜文字に接しているために、文字のない状態を想像することが出来なくなっています。もし、文字がなかったら？　大変なパニックに陥りそうな気がします。メールもできない。契約も、言った言わないの水掛け論になってとても成り立たない、などと、次から次に心配な出来事が浮かんできます。ですが、それは、文字に頼りすぎた現代社会を浮き彫りにしているだけです。

文字はなくても、「話し言葉」さえあれば、人間は十分に社会生活がaイトナメル。世界の中には、今でも文字のない社会が存在します。たとえば、アフリカの少数民族を思い出してみてください。彼らは、文字を持っていません。でも、テレビに映し出される彼らは、実に生き生きと話し言葉だけでコミュニケーションをとって生活しています。毎日パソコンに向き合ってフーフー言って書類作りをしている私たちよりも数倍おおらかに見えます。①口で話され、耳で聞かれる「話し言葉」があれば十分に社会生活はイトナメルのです。

この日本列島にも、まだ文字のない時代があった。いいや、文字を使いはじめてからの歴史の方が話し言葉だけの歴史よりも浅い。話し言葉だけの長い言語生活の歴史に対して、文字で記録するという書き言葉の歴史がはじまってから、たかだか一四〇〇年くらいしか経っていないのです。日本人は、文字を持たなくても、アフリカの文字のない社会の人々と同じように、日本語を話し、部族を形成し、元気一杯に日常生活をイトナンでいたと考えられます。

彼らの話していた日本語ってどんなものなのか？　そもそも日本語はどのように形成されたのか？　これらの問題は、誰にとっても知りたいことです。特に日本語のルーツに関しては多くの人が注目し、明らかにしようとしている謎です。でも、今のところ、いろいろな説があって、どれが正しいのかはっきりしません。とりわけ、北方からという説と南方からという説が大きく対立しています。落ち着くところは、南方系のオーストロネシア語の系統を下地に、北方系のアルタイ語の系統が流れ込んで融合し、日本語の基盤が形づくられていったという考えに思えます。こうして形成されていった日本語を、日本人は、長い間書き記すことなく、「話し言葉」としてのみ使用しコミュニケーションを行なっていたのです。

【中略】

文字のない時代にあっても、話し言葉さえあれば、小さな部族で日常生活をイトナムには別にbシショウはありません。でも、部族が大きくなってくると、目の前にいる相手とだけコミュニケーションをとっていればすむ場合ばかりではありません。どんなに叫んでも、聞こえない距離

にいる人間ともコミュニケーションをとらなくてはなりません。また、大きな集団生活を維持するための決まりやその集団の精神生活を支えるための言い伝えを次の世代に伝える必要が出てきます。さしあたっては、優れた記憶力の持ち主を選んで、その任務を遂行させればいいのです。

ですが、音声による伝達は、耳によって受け取られることだけを目的にしていますから、語った途端に消えてしまいます。とくに困るのは、優れた語り手の不慮の死によって、集団の精神生活を支えるための伝承が途切れてしまうことです。なんとか、次の世代に自分たちが苦労して得た智恵や知識を確実に伝える術は無いものか？　記録すること。記録にして残せば、後の時代の子孫たちも、それを見ればさまざまの智恵や知識を得ることが出来ます。記録するのに適切なものは、何でしょうか。

絵。絵でも確かにある程度は伝えることが出来ます。けれども、描くのに時間がかかるし、誤解のないように伝えることは難しい。そもそも、絵というのは、流れ続ける時間のなかのある瞬間をとらえて表現するものです。それに対して、話し言葉は時間の流れに沿って展開するものです。最初から、②性質が異なる媒体なのです。時間的に展開する話し言葉は、やはり時間的に展開する「文字」に写し取っていくのが最も賢明な方法です。

日本人も、「文字」に記して自分たちの文化的な財産を子孫に残そうと考えた。でも、「文字」と一口に言っても、どうしたらいいのでしょうか。そもそも「文字」がないのです。なにしろ、「話し言葉」だけで、生活してきましたから。「文字」をどうしたら、手に入れられるのか。とるべき方法は二つしかありません。一つは、自分たちで、自分たちの話し言葉を記すのに適した文字を創り出していく方法。もう一つは、すでに創られ使われている他国の文字を借りてきて利用する方法です。

さて、あなたなら、どちらの方法をとりますか。［A］ほうが、一見大変そうにみえます。それに対して、［B］方が簡単そうに思えます。でも、新しく文字を創り出していく方法は、文字を書いていくシステムさえ思いつけば、思っているよりも創造的で楽しい作業になります。

さて、もう一方のよその国の文字を借りるという場合は、思っているよりも楽ではないのです。とりわけ、書き記すべき日本語とは違った構造の言語の文字を借りた場合には、その苦労は半端ではありません。いったん出来上がった家を自分の好みに合わせてリフォームしていく作業を思い起こしてください。新築の家を建てるのよりも、技術がいります。新築の家なら、新米の大工さんにでもできる。でも、リフォームは新米の大工さんには出来ない。熟練した大工さんになって、はじめて好みにあったリフォームが出来るのです。

出来上がってそれなりに完成している物を作り変えるという作業は、実は新品を造るよりもある意味では大変だということに、日本人は気づきませんでした。

というより、日本には、お隣に中国という文化国家があり、政治・経済を含めてすべてを取り入れ、吸収せざるを得なかったといった方がいいかもしれません。中国には、紀元前一五〇〇年頃に発生した漢字が存在しています。尊敬している国に漢字という手本がある。それっ、という

わけで、よくも考えずに日本が漢字を借りてしまうのはごく普通の道筋です。

でも、これが、後に日本の表記体系を複雑きわまりないものにしてしまう原因になるのです。日本のように、書かれた人名や地名をどう読むのか見当がつかないなんて国は、そうざらにあるものではありません。文字をよく知っている人でも、正しく声に出して読めないという不思議な国なのです。以下、このことをポイントだけつかみながら述べていくことにします。

文化も高く、日本よりも数段、勝っている中国の漢字を、日本が受け入れたのは、『古事記』や『日本書紀』によれば、三世紀の終わりのこと。中国からの書物『論語』『千字文』との対面がそれであったと記されています。実際にはもう少し遅く、四世紀頃のことと考えられています。

漢字を借りて、日本語を書き表せば良い。けれども、そんなにうまく行くわけがありません。もともと、中国語と日本語とは異なる体系の言語なのです。たとえば、日本語の語順は、述語が最後に来る。ところが、中国語では、英語と同じく主語の後に直ちに述語が来る。

また、日本語には、多くの助詞・助動詞があり、それが実質的な意味を持つ単語に膠で接着したようにくっついて、文法的な役割を示しています。「膠着語」と呼ばれる言語の一つです。一方、中国語には、日本語の助詞・助動詞に該当するようなものがとても少ない。文法的な役割は、実質的な意味を持つ単語の順序で表します。「孤立語」と呼ばれる言語の一つです。

③こんなふうに、異なる系統の言語の「文字」を借りてしまったために、日本人は日本語を書き表すのに、相当な苦労を払わなければならなくなった。表記に苦しむ日本人の姿は、『古事記』の序文にうかがえます。『古事記』の序文は、こう訴えます。※図1が原文。読みやすさを考えて、句読点を付して引用します。

【引用文】

上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難、已因訓述者、詞不逮心、全以音連者、事趣更長。是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓録。即辞理叵見、以注 D 、意況易解、更非注。

【現代語訳】

昔は C や心が素朴だったので、文章にすることがとても難しい。漢字を使って述べてみると、どうも心に思っていることが十分にあらわされていない。そこで、漢字の音だけを借りる方式で述べてみると、恐ろしく文章が長くなってしまう。困った挙句、この『古事記』は、表意文字としての漢字に、音だけを借りた漢字を交ぜて書くことにします。また、事柄によっては表意文字としての漢字を連ねて書きます。その場合、文脈がとりにくい時は、「注」をつけて分かりやすくしました。意味がとりやすい時は、「注」は加えません。

借り物の漢字では、うまく日本語を書き表せないもどかしさ苦しさが c セツセツと語られています。隣国にすでに作られた漢字があったということは、それを利用できるという d アンイさと

引き換えに、利用することによってひき起こされる問題が浮上してきたのです。

けれども、④漢字が表意文字だったことが幸いしました。とにもかくにも、「やまとことば」を漢字にあてはめることができるのです。たとえば、「山」という漢字を受け入れる。同時に「サン」という中国音も受け入れる。次に「山」を意味する「やまとことば」を当てはめて、「やま」とも読む。こうすれば、日本語を表すために漢字が使えるのです。一見すばらしい工夫に見えます。

ところが、これは、漢字一字に対して複数の読みを与えてしまったことになるのです。これが、最大の問題です。韓国では、日本と同じように中国から漢字を取り入れましたが、漢字とその発音を受け入れただけです。日本のように、該当する自国の言葉をその漢字の読みに振り当てることはしませんでした。これが普通の受け入れ方です。

日本語の表記が、世界でも稀なほど複雑なのは、一つの漢字に複数の読み方をするような受け入れ方をしたところから生じてしまったのです。だから、日本最古の歴史書『古事記』は、漢字を辿ると意味は分かるけれど、声に出して読もうとすると、読めない。現在でも、日本人が時々経験する「漢字が読めない」という不思議な現象は、漢字という文字を受け入れた時に遡ることがお分かりいただけたのではないでしょうか。

（山口仲美『日本語の歴史』より）

※図1……ここでは省略されている。

問1　――線a～dのカタカナを漢字に直しなさい。ただし送りがなが必要なものにはひらがなでつけること。

問2　次の文章は本文のとある段落の最後にあった文章をぬき出したものです。この文章を元に戻すとしたらどの段落の前に入れるのが最もふさわしいですか。この文章が入る直後の五字を文中からぬき出しなさい。（句読点も字数に含みます）

韓国のハングルなどは、その良い例です。ハングルは、李朝第四代国王世宗の時代に学者によって考案され、一四四六年に「訓民正音」として公布された朝鮮固有の文字です。アルファベットのような表音文字でありながら、漢字の原理を取り入れ、母音字と子音字を組み合わせて音節単位に書く文字です。一定のシステムに従って体系的に創り上げられています。

問3　――線①「口で話され、耳で聞かれる『話し言葉』があれば十分に社会生活はイトナメルのです。」とありますが、文中では「話し言葉」だけでは事足りず「文字」が必要な場合についても述べられています。どうして「文字」が必要になるのですか。その理由を「ため」に続くように文中から二十八字でぬき出して答えなさい。

問4　――線②「性質が異なる媒体」とありますが、何と何がどのように異なるのですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　絵は描くのに時間がかかるものであるのに対して、文字は書くのに時間がかからないものであるということ。

2　絵は流れる時間を切り取るのにふさわしいものであるのに対して、文字は流れる時間を切り取るのにふさわしいものであるということ。

3　絵は文字にして伝達をすることが難しいものであるのに対して、話し言葉は文字にして伝達しやすいものであるということ。

4　絵はある瞬間を切り取っておくことが得意なものであるのに対して、話し言葉は時間の流れを持つものであるということ。

問5　空らん［A］・［B］にこの文章の内容をふまえてことばを入れた時、［B］に入ることばを文中から四字以内でぬき出しなさい。

問6　――線③「こんなふうに、異なる系統の言語の『文字』を借りてしまった」とありますが、どうして日本はこのようにしてしまったのですか。その理由を「から」に続くように文中から五十字以内でぬき出し、はじめと終わりの三字ずつを答えなさい。

問7　文中の「古事記」序文の引用文およびその現代語訳について次の問いに答えなさい。

(1)　「古事記」序文の【引用文】を参考にして【現代語訳】の中の空らん［C］に漢字二字を埋（う）めなさい。

(2)　【引用文】の中にある空らん［D］に入る漢字として最もふさわしいものを【現代語訳】を参考にして次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　空　　2　明　　3　惑　　4　暗

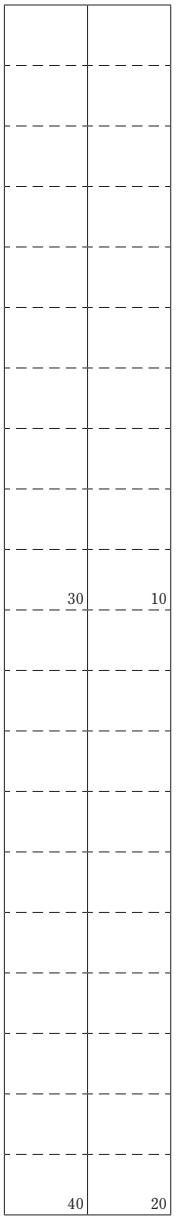
問8　――線④「漢字が表意文字だったことが幸いしました」とありますが、どうしてこのように言えるのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　漢字の意味するものを日本語の言葉から選んであてはめることができたから。
2　中国語が意味するものと日本語のそれは同じであることが多かったから。
3　日本語で使用する時に中国の音を受け入れずに使用することができるから。
4　表音文字と違い日本語を書き表すのにふさわしい文字であったから。

問9　――線「日本の表記体系を複雑きわまりないものにしてしまう」とありますが、筆者が言う日本語における漢字の複雑さとはどのような点ですか。解答らんにあうように、四十字以内で答えなさい。

（下書きらん）

日本語の漢字は



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

翼の父は苦情処理係に異動となったことで、うつの症状が出て会社を一か月ほど休んでいる。その理由を、母と叔母の会話を盗み聞きして知った翼は、父のもとへ向かった。

丘の斜面をダッシュでいっきに駆け上ると、急に視界が開けて広々とした飛行場全体が見渡せた。青空と滑走路の間に挟まれるようにスタジアムの屋根が遠くに見えた。

「お父さん」

ベンチに座ったベージュのコートの背中に呼びかけた。お父さんは身体を半回転させて振り向いた。

「翼……。どうした？」

①突然やって来た僕に少し驚いた様子、ううん、戸惑った感じだ。

「うん、別に、何ってことはないんだけど……。あ、そうそう、プロペラカフェでアイスクリームとか、お父さんに奢ってもらおうと思ってさ」僕はにっと笑って答えた。

実際、そんな気持ちも少しはあったけど、本当の理由は言えない。

「でも、よく分かったな、ここ」

「お母さんから聞いた。だけど、前にお父さんが言ってたじゃん。ここがいちばん好きな場所だって」

「そうだった……かな」

僕はお父さんの隣に座った。

見渡すと、南側の滑走路脇には大きな白い文字で〝CHOFU〟と描かれていて、滑走路以外の場所にはシートをかけられたセスナ機やヘリコプターもたくさんあった。

「なんかポカポカしてて気分いいねえ。こういうの小春日和って言うんだよね」

会話が途切れてしまったので、僕から話し掛けてみた。

「小春日和かあ。本来は［A］くらいに使う言葉だけど、まあ、そんな感じだな。でも、そんな言葉、よく知ってたな。」

「松本先生に教えてもらった」

松本先生は女の先生で、僕らのクラス担任。去年の六月に結婚して名字が変わった。運動会のクラス対抗リレーで優勝したりすると、涙をボロボロこぼしながら泣く感激屋さんだ。そんなことを話すとお父さんは「いい先生だな」とぽそっと呟いた。

「そういえば、去年の運動会、お父さん、忙しくて行けなかったなあ。ごめんな……」

「ううん、いいよ。六年生になってもまだあるし、今度来てくれれば。そしたら僕さ、一等賞になれるように頑張るよ」

「そうか、頑張るのか」

お父さんは小さく頷くと、また黙って滑走路の方へ目を向けた。話をするのが面倒臭いんだろうか。

「あのさあ、僕、一緒にいたら邪魔？」恐る恐る訊いてみた。

「うん？」

「ひとりでいたいなら、僕、帰ってもいいけど……」

お父さんは「邪魔だなんてことはないさ」と首を横に振った。ちょっとほっとした。

「あ、お父さん、あれ」

ゴーゴーなのかジージーなのか、あるいはブーンなのか。そんなふうに聞こえる爆音を出している飛行機を指差した。

「②あの、下がブルーでグリーンのラインが入ってるやつってなんていう名前だっけ？」

前にお父さんから教えてもらっていたけど、忘れたふりをして訊いてみた。

「うん、ああ、あれはドルニエだな」

少しぼてっとした機体で、車輪は前にひとつ、両方の翼の下にひとつずつ。ふたつのプロペラがついている。

「ああ、そうだった、ドルニエだ。大島と新島と、それから神津島にも飛ぶんだよね、えーと確か十九人乗りだったっけ」

「よく覚えてるじゃないか」

お父さんはそう言いながら微笑んだ。周りの空気が和むような気がした。

a すると西の空から、ゴーというエンジン音とシューという風を切る音が聞こえてきた。青いお腹を見せながらドルニエが姿を現した。僕らは空を見上げた。

本当は凄いスピードなんだろうけど、まるで糸で吊られて動いているようにゆっくりと僕らの頭上を通過する。ふわりと着陸したドルニエは滑走路をUターンして黄色いラインに沿って移動する。白いつなぎを着た誘導員が両手を広げて合図をすると、停止した。

「なあ、翼」

「ん？」

「学校は楽しいか？」

「まあまあかな。テストと宿題がなければもっといいけどね」

「学校でいじめられているとかはないのか？」

「うん、ない。でもなんで？」

「お前、転校するの嫌がってたし。慣れたところから別のところに移るのって……」お父さんは明らかにその後に続く③言葉を呑み込んだ。

「いや、まあ、転校生って、そういう対象にされがちだってことも聞いたことがあるし、もしそうだったら、悪いことをしたかなって思ってさ」

「ううん、大丈夫だったよ」

転校して、最初は友だちもいなかったからなんとなく居心地は悪かったけど、すぐに仲のいい友だちもできた。だからお父さんが心配するようなことはない。

「まあ、嫌なやつはいるけどね」

吉本は登下校の道で、僕のランドセル目がけてハイキックをする。これは僕だけにするんじゃなく、みんなにもする。理由は分からないけど、どこか憂さ晴らしをしているような感じだ。そういうことを平気でするくせに、先生の前では優等生を演じている。勉強はできるので、松本先生もすっかり騙されている感じだ。

「どこにでもそういうやつはいるんだな……」

「でも、僕、平気だから。それに、やられたらやり返すし」

それは嘘だ。僕は〝だめだこいつ〟とあきらめて何もしない。

「そりゃあ逞しい。お父さんも少しは翼のそういうところを見習わなくちゃいけないな」

僕は少しⅠバツが悪くて苦笑いをした。

「いつからこんなに臆病になっちまったのかなあ」お父さんが呟く。

「えっ？」

「お父さんだってお前くらいのときは怖いもの知らずだったのに、情けない……。まったく大人になるとろくなことはない」お父さんは頭を振った。

意味が分からずにお父さんの顔を覗き込むと「いや、なんでもない、独り言さ」と④微かに笑ってみせた。

「ああ、そう……」

「ま、お前がお母さん似でよかったってことさ。お母さんは、ホントに大らかな人だし、それにどこか肝が据わってて……。お父さんは随分とお母さんに救われてる」

「じゃ、お母さんと結婚できてよかったじゃん」

「その通りだな。でも、お母さんはどう思ってるかな。お父さんはすぐへこむし、だめな旦那さんだから後悔してるんじゃないかなあ」

「お母さんだって結婚できてよかったって思ってるよ、たぶん……」

お母さんがそう言ってたと教えてあげたかったけど、盗み聞きしてたことがバレるとマズいので、最後は曖昧にした。

「だと、いいけど……」

「うん。だってお父さん、家族のためにずっと頑張ってきたじゃん」

お父さんは⑤苦笑いしながら「……きた、か」とこぼすと「最近は頑張ってないし、サボってばっかりだな」と目を伏せた。

励まそうと思ったのに逆効果になってしまって焦った。

「お父さん、あのさ、あの僕さ……」

「ん、どうした？」

「ごめんね……」
「何が？」
「この間、お父さんは休んでばっかりいていいなあって言ったりして……。あれはさ、僕さ、そんなつもりじゃ……。ごめん……」
お父さんは僕の方に顔を向けると「何も謝らなくていいさ。事実だから」と微笑んだ。
「でも……」
「もうそんなことは気にしなくてもいいから」
「だけど」
「お、また一機飛ぶな」
お父さんが顎を突き出す方向を見ると、小さなセスナ機が飛び立った。
「お父さんさあ、小さい頃、パイロットになりたかったんだ」
その話は前にも何度か聞いたことがある。

「　B　」

「ふーん」
「あ、そうだ、お前は将来、何になりたいんだ？」
「そうだなあ、ゲームクリエイターかな。大学出たら大きいゲーム会社に入って、それでさ、世界中で大ヒットするゲームを僕が作るんだ」
「ほお、それっていいじゃないか」
「でも、理科の実験とかも好きだから科学者もいいかなって思うんだよね。だけど、それにはいっぱい勉強しなくちゃいけないし。それがちょっとね」
僕は Ⅱ口を尖らせて腕組みをした。
「あのさ、お前に翼って名前をつけたのは、思う存分に翼を広げて、人生っていう大空を自由自在に飛んでほしいって思ったからなんだよ。でもな、人生にはいろんな空があるんだ。こっちの空を飛びたい、あっちの空も飛びたい、そう迷うこともある。まあ、いろいろ考えながらお前の空を決めていけばいいさ。まだ先の話だし、時間はある。とにかく今は、お前の好きなことをしてたくさん楽しめばいい」
「うん、そうする」
「えーと、お前が大学を卒業して就職するまで、あと何年だ？」
お父さんは指を折りながら数えて「十一年か」と頷いた。
「お前がちゃんと巣立つまでなんとか踏ん張らなくちゃな」
「b うん、でも、あんまり無理しなくてもいいよ」

「ははは、そういう生意気なことを言えるようになったか。……でも、ありがとうな」そう笑いながら僕の頭を撫でた。

僕は妙に照れ臭くなって「もう、やめてよ」と頭を逃がした。だけど、以前のお父さんが戻ってきたようで僕は嬉しかった。

と、そのとき、c地面すれすれに飛んできた一羽の鳥が、風に乗るようにふわりと空高く舞い上がった。

「わっ、すげー、急上昇だ」

「やっぱり、あんなふうに人は飛べないよなあ……。でもさ、ホントのところ、鳥はどう思ってるんだろうな」

「ん、どうって、何が？」

「そもそも鳥って、空を飛ぶことがそんなに楽しいんだろうか。飛べることが羨ましいっていうのは人間の勝手な思い込みなんじゃないかな。毎日毎日、同じことをしてたら飽きるだろうし嫌にもなるもんだよ。だとすれば、鳥も人間もあまり変わらない。結局みんな、その運命から逃れられないってことなのかもしれないな」

「どういうこと？」

「ん？　ああ、いずれお前にも分かるときがくるさ、良くも悪くも……」

「ふーん」

d舞い上がった鳥は飛行場の上を旋回すると、日差しの中に飛び去った。

「さあて、もう一月も終わりだなあ。寒い寒いって言ってもこういう日もあるし、すぐに春がやってくる」

「そうだね」

お父さんは両膝を手で軽く叩くと立ち上がった。

「翼、お父さん、来週から会社に行くよ」

「え、大丈夫……なの？」

僕は驚いてお父さんの顔を見上げた。

「さあ、どうだかなあ……」お父さんは一度首を捻って苦笑いした。

「でもな、⑥お父さん、気づいたんだよ」

それから視線を遠い空へ向けると、お父さんは穏やかな表情で言った。

「それでも鳥は空を飛ぶんだよ」

（森　浩美『家族の分け前』所収「それでも鳥は空を飛ぶ」より）

問1　空らん［A］に入る最もふさわしいことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　三月　　2　六月　　3　九月　　4　十一月

問2　═線Ⅰ「バツが悪くて」、Ⅱ「口を尖らせて」とありますが、それぞれ「翼」のどのような気持ちが読み取れますか。最もふさわしいものを、後から一つずつ選び、番号で答えなさい。

Ⅰ「バツが悪くて」　1　恥ずかしさ　2　心細さ　3　くやしさ　4　恐ろしさ

Ⅱ「口を尖らせて」　1　憎悪　2　不満　3　不安　4　自信

問3　──線①「突然やって来た」とありますが、「僕」がやって来たのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　一人でゆったりとしているところに突然現れ、お父さんの驚く顔が見たかったから。

2　お父さんを元気づけるとともに、思いやりのない言葉を言ったことを謝りたかったから。

3　転校先でできた友だちの話をするとともに、嫌な子について相談をしたかったから。

4　急いでお母さんが応援していることを伝え、お父さんを勇気づけてあげたかったから。

問4　──線②「あの、下がブルーでグリーンのラインが入ってるやつってなんていう名前だっけ？」とありますが、このように「僕」が聞いたのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　珍しい色をした機体を見て、お父さんなら知っていると思ったから。

2　お父さんから帰れと言われることを恐れ、話題を変えようと思ったから。

3　お父さんとの会話を広げるためのきっかけをつくろうと思ったから。

4　前にお父さんから名前を教えてもらったが、思い出せなかったから。

問5　──線③「言葉を呑み込んだ」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　翼がわざわざ会いに来たということは、何か話があるのではないかと思い、話を聞こうと思ったから。

2　翼が悩みを抱えていないか気になったが、上手に聞き出せなかったので、別の聞き方をしようと思ったから。

3　転校先での様子を知りたかったが、翼にとって聞かれたくないことを聞こうとしていることに気づいたから。

4　翼についての話題が、まさに自分のおかれている状況を話すことになると気づきためらわれたから。

問6　――線④「微かに笑ってみせた」と、――線⑤「苦笑い」についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　前者は子どもを安心させるためのものであり、後者は自分自身の不甲斐なさからくるものである。

2　前者は子どものたくましさに感心してでたものであり、後者は厳しい世間へのつらさからきたものである。

3　前者は子どもへ感謝の気持ちを示すためのものであり、後者は自分の過去を反省することでたものである。

4　前者は子どもへ自分の強さを示すためにでたものであり、後者は自分への諦めからでたものである。

問7　空らん［B］には「お父さん」の話した内容が入ります。次のア～オの文を意味の通るように正しく並び替えるとどうなりますか。最もふさわしいものを後から一つ選び、番号で答えなさい。

ア　残念ながらその望みは叶わなかったけど、それでも航空会社に勤めることができたから半分は夢が叶ったっていうことだな。

イ　でも人間は飛べないだろう。

ウ　入社した頃は、多くの人たちの空を飛ぶ喜びをサポートできる仕事だと誇りを感じたもんさ。

エ　ありきたりな理由だけど、鳥が飛ぶのを見てて、ああやって空を自由に飛び回ることができたら楽しいんだろうなあって思ったんだよ。

オ　だからジェット機のパイロットに憧れて。

1　ア→ウ→イ→オ→エ　　2　ア→エ→イ→オ→ウ

3　エ→オ→イ→ア→ウ　　4　エ→イ→オ→ア→ウ

問8　――線⑥「お父さん、気づいたんだよ」について、次の問いに答えなさい。

(1)　ここで「お父さん」が気づいたこととはどういうことですか。その内容として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　つらさや苦しさから目を背(そむ)けるのではなく、今自分がおかれている現実に向き合って頑張っていかなければならないと気づいたということ。

2　息子(むすこ)の翼が転校先でも元気に過ごしていることを知って、そのたくましさを見習わなければならないと気づいたということ。

3　パイロットに憧れて入社したことを思い出し、これからも飛行機に関わる仕事を続けていくべきだと気づいたということ。

4　自分ひとりだけで悩みを抱えるのではなく、もっと家族にも助けてもらうことがあってもいいと気づいたということ。

5　息子に翼という名前をつけた理由を語ったことで、自分自身がもっと自由に生きるべきだと気づいたということ。

(2)　ここで「お父さん」は、来週から会社に行くことを決心していますが、そのきっかけと考えられる表現はどれですか。文中の----線a～dから最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

3　次の詩を読んで後の問いに答えなさい。

幻の花　　石垣　りん

庭に
1 今年の菊が咲いた。

子供のとき、
① 季節は目の前に
ひとつしか展開しなかった。

② 今は見える
2 去年の菊。
おととしの菊。
十年前の菊。

遠くから
3 まぼろしの花たちがあらわれ
今年の花を
連れ去ろうとしているのが見える。
ああこの菊も！

そうして別れる
私もまた 4 何かの手にひかれて。

（詩集『表札など』より）

問1　この詩に使われている表現技法の組み合わせとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　直喩・体言止め　　2　擬態語・反復法　　3　擬人法・体言止め
4　直喩・反復法　　5　擬態語・擬人法

問2　――線①「季節は目の前に／ひとつしか展開しなかった。」とはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　移り変わる季節自体に興味を抱くことがなかったということ。
2　今自分がおかれている季節しか意識に入らなかったということ。
3　心の中にあるひとつの季節しか思い出されなかったということ。
4　ひたすらに自分の好きな季節だけを感じていたということ。

問3　――線②「今は見える」というのは、小さい頃と今とで作者の心境が変わったことを表します。心境が変わったのはなぜだと考えられますか。それを説明した次の文の空らん[A]、[B]に入る最もふさわしいことばを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

様々な[A]と、[B]を積み重ねてきたから。

1　知識　2　思考　3　分析　4　年齢　5　経験　6　調査

問4　詩中の═══線1～4のうち、意味あいが異なるものを一つ選び、番号で答えなさい。

問5　この詩の作者が言おうとしていることとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　どんなものでも、命には限りがあるということ。
2　時間の流れは、だれももとにもどせないということ。
3　滅んでいくものは、すべて美しく見えるということ。
4　人にとっては、感性をみがくことが大切だということ。

4 次の①～⑤の各組の漢字は、それぞれ共通の部首をつけることで、別の漢字にすることができます。その部首名をひらがなで答えなさい。

① 各　女　寸
② 丁　予　付
③ 孝　己　方
④ 戸　田　市
⑤ 士　音　因